

7月 月例会 報告

【日 時】令和 8年 7月25日 (土曜日) 13時から17時
【会 場】中央区・明石町区民館 参加者15名 リモート参加6名
第一部 【勉強会と懇談会】

1. 研究発表：「遅かな古代縄文期における祭礼」

磐笛（いわぶえ）奏者 玉川 沙羅さん

玉川氏は磐笛（いわぶえ）の奏者で、全国の神社や聖地で音霊と武魂の奉納を続けておられる。発表は会場参加者が祭礼に参加するという形で始まりました。

以下に発表の要目を記します。

（1）「祈り」とは「いにしえ」からの魂の想い：

縄文期における祭礼に最初に響く磐笛は天と地を繋げ、神様に降りてきていただくための御神具だった。

（2）磐笛について：

- ①人間の可聴領域を超えた倍音を含む。
- ②三島由紀夫「岩笛の音は心魂をゆるがすような神々しい響きを持っている」。
- ③氏は四つの磐笛を吹かれました。それらは、糸魚川の翡翠石・八海山の石・サムカイト・隕石溶融石で、優しい或いは堅いなど、音色は様々で、ピッコロとは大違いでした。

（3）その他事項：

- ①指及び腕の組み方による正確の違い。
- ②日本人と西洋人の音認知の違い。
- ③まわり歌（回文と同じ）を二例紹介。
- ④旅行会での集合写真に見る陽光と影。
- ⑤平将門供養神社の配置が北斗七星の形をなぞっている。
- ⑥古田武彦後援会「弥生の土笛と出雲王朝」。

（4）感想など：

- ①異例な形式での研究発表でしたので、戸惑いが大きかった半面、普段とは違った厳かな気分になりました。
- ②配布参考資料である「弥生の土笛と出雲」への言及は発表の最後で、殆ど解説されなかったため、「デスカッションをしたい」との要望は唐突な感じがぬぐえませんでした。
(説明100分、質疑1分)

【懇談会】 休止

【休憩】 15分

第二部 【勉強会と読書会】

新保 高之氏

1. 【勉強会】 題名：「古田武彦著作集」から『邪馬壹国の論理』その1

本書は、朝日新聞社から1975年に刊行され、その後、ミネルヴァ書房から「古田武彦古代史コレクション④」として、2010年6月に初版第1刷が発行されました。副題は「古代に真実を求めて」です。先生は「はじめに」で、「この第四の本は、ここ数年間のわたしの戦いの跡だ。学界に確固たる業績をもつ大家たちとの歯に衣着せぬ論争、多くの学者たちの嘲笑に対する容赦なき反論、それがこの本の生命である」と述べておられる。

（1）履修対象：

- ①目次と各編章題の提示
- ②「はじめに」の要点（上述）
- ③第一編の第一章〔戦後古代史学へ疑問〕・第二章〔邪馬台国論争は終わった〕。

（2）履修内容：

- ①これらを提示して
- ②「はじめに」の抽出要点
- ③各章を構成する全節抽出した要点の解説と説明でした。第一章の各節は、①造作ではない記・紀神話、②安易な「原文改定」論者、③実在の証拠史料無視、④厳格な史料批判を貫く。第二章の各節は、①序、②一～十一、③結び、です。

（3）重要事項・質疑等：

- ①「はじめに」で先生の決意が紹介されました。
- ②古田先生が言われた「陳寿を信じ通す」に関し、「史書編纂者は時の権力者の意図を組み込んで記述するのでは」が大きな問題になり、「信じる」とは科学的でないなど、参加者の間で多様な意見が飛び交いました。最後に発言された古賀氏の論点を整理された説明と解説に納得しました。
(解説・質疑50分)

2. 【読書会】 「清寧天皇紀その2」

（1）対象：顕宗天皇即位前記でした。

（2）「顕宗紀」の構成等：

本紀は即位前記と元年（485）～三年是歳条（487）で構成され、主要記事としては、

- ①即位前記（億計弘計兄弟王の苦難・兄弟が身分を明かす・互いに皇位を譲り合う）。
- ②元年条（第王が即位を承諾・置目老老嫗の功績）。
- ③二年条（復讐〈雄略陵暴き〉を思い留まる）。④三年条（天皇崩御・任那と百済が攻防）、があります。

（3）「顕宗紀」の記事の特徴：

- ①即位前記が全紀のほぼ半分を占めており、
- ②殆どが説話的な記事です。
- ③歌謡詞と中国史籍等の文飾が顕著です。

（4）説明の内容：「顕宗天皇紀」即位前記の原文記事・頁注釈・補注と現代語訳を例示しての説明でした。

（5）質疑等： ①兄より先に弟が天皇に即位した例などについて事例紹介がありました。

(解説・質疑35分)